益城の文化財

砥川用水と富田茂七顕彰碑 その2

ー砥川ー

▲碑の一番上には「既澤」という文字が彫られている
◀富田茂七の顕彰碑の全体

（前号から続き）

用水の工事は一度失敗しましたが、願い出ること数十回、郡代は「失敗したらその罪はどうして受けるのか、莫大な資金を要するものだ」と問いつめました。富田茂七は「私利私欲ではない。村の救済のためにするのが庄屋の任務です。不成功の時には一命を棄ててその罪は受けます」。郡代もその熱意に動かされ、ついに奉行所に取り次ぎ、寛政11（1799）年、茂七自ら実地調査を行い工事を監督し鍬で掘ったり計測したりしました。

工事期間中、悪口を言われたり、石や土の塊を投げられることもありましたが、黙々とその成功を期しました。

約10年を経て用水路は完成し、享和元（1801）年3月19日「砥川用水」の疎水式が行われました。

村人たちは、矢のように流れる用水を目にして、歓声をあげました。碑文にはこの様子を「喝采雷の如し」「砥川村万才、茂七万才」また「砥川村を屈指となすは皆茂七の力なり」とあります。

荒れ果てていた砥川・木崎地区などの105ヘクタールの田んぼは、これにより豊かなものとなりました。

その後、砥川地区では3月19日を、「水神祭」と定め、住民は用水の恵みと富田茂七への感謝のお祭をしてきました。

参考文献『益城町史　通史編』
益城町文化財保護委員会

俳句

早川宏次　選

赤蜻蛉群はぐれしか吾れに添う　惣領　小森英美子
彼岸花棚田の区切り赤でひき　木山　山口サツキ
満月や阿蘇の草原銀の波　安永　川崎　節子
風に揺れコスモスが呼ぶ木犀香　下陳　城　陶子
黄金波まさに芸術案山子立ち　寺迫　藤田　光子
彼岸冷え色づく稲穂と曼珠沙華　惣領　新居　露子
秋空をふと眺むれば鰯雲　惣領　阪口由美子
すず虫の和音に仇な腹の虫　木山　増岡　伸禧
山里に早くもひびく百舌の声　惣領　阪口　基明

狂句

田上富岳　選

ひょっとすると　すぐ入院て言わすかも　下陳　山田　凡骨
ひょっとすると　日本の島がのうなるぞ　宮園　永瀬　美波
ひょっとすると　次期会長にならすかも　惣領　小森英美子
ひょっとすると　望みが叶う拉致家族　木山　増岡　酔粋
ひょっとすると　又もパトロン替えたろか　惣領　阪口　基明
色づき始め　パパとにゃ風呂に入らっさん　宮園　永瀬　美波
色づき始め　稲刈り機械動き出し　寺迫　藤田　光子
色づき始め　丁度食べ頃きたごたる　宮園　井藤　吉郎
色づき始め　やっぱ気になる垣根ごし　惣領　阪口　基明
色づき始め　孫も十五のおめかしぞ　下陳　山田　凡骨

狂句次号の課題　「それっきり」「まだ先の話」

投稿は役場広報係まで。
投稿締切日は毎月15日です（当日必着）。
※数種に投稿される場合は、別にしてお送りください。